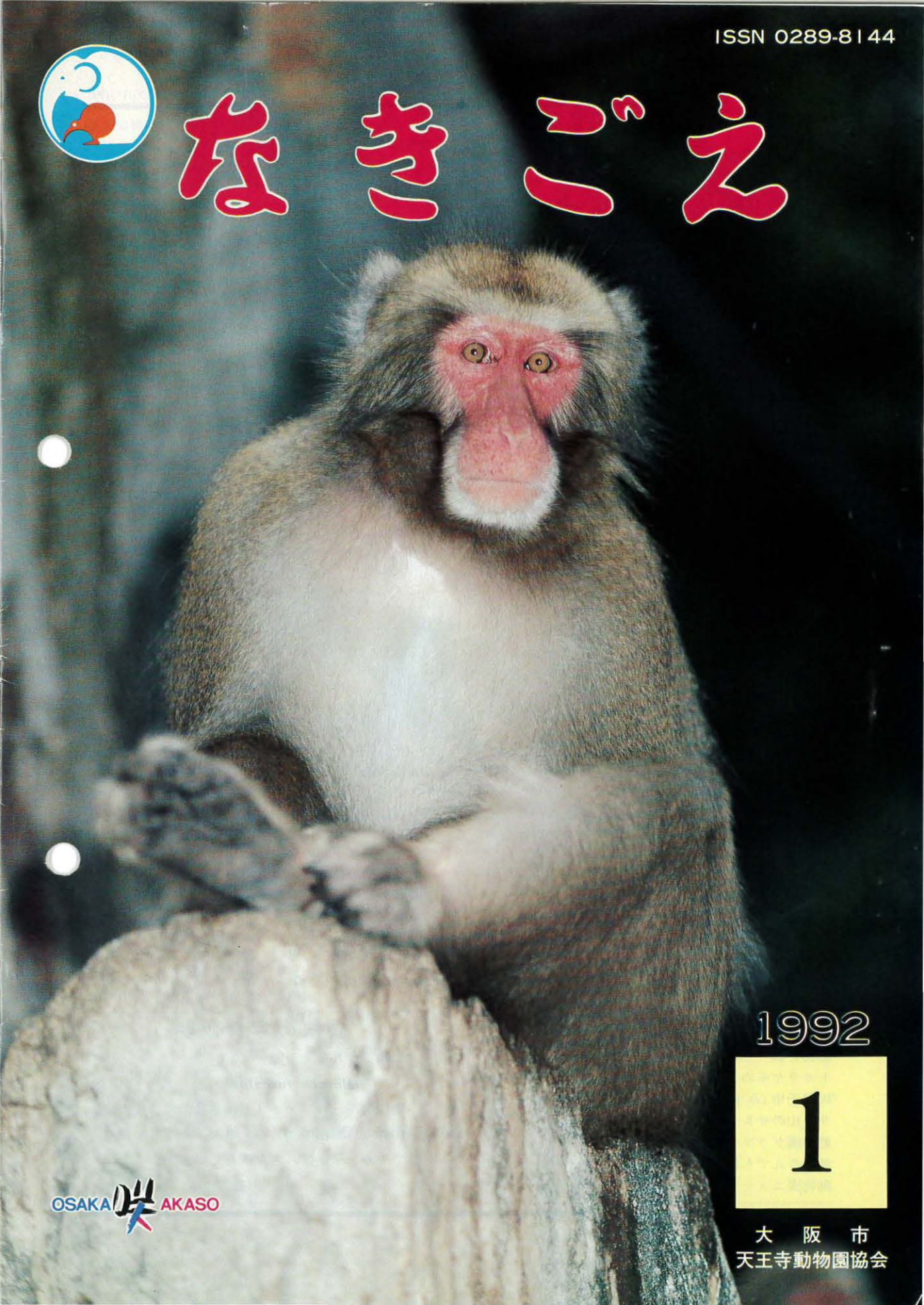
ISSN 0289-8144

# なきごえ



1992

1

大　阪　市
天王寺動物園協会

OSAKA 咲 AKASO

# 動物と私

増井憲一

あけましておめでとう。中年の初夢の話をしよう。

風吹きすさぶ冬枯れの山の木立ちにニホンザルの群れがひそんでいる。背を丸め抱き合うサルの佗しげな姿が雪間に見え隠れする。尾根筋の岩陰に身を寄せている私の傍らに、サルが齧った灌木の小枝が風にふるえている。ふいに風が途切れ、雪がやみ、日が射しはじめる。太陽の温もりが体中に伝わる。サルたちは日向ぼっこや毛づくろいにくつろぐ。子ザルがはしゃぎ回る。その向こうに青空が広がり、真白な雪の稜線がくっきりと浮かびあがる。この風景の見わたす限り、人間は私ただ一人。私はサルたちに入門を許されたような気がして、思わずホウーッと彼らの合図の声をまねてしまう。

険しい山肌、深い谷間、それらを優しく覆う樹林。連なる山の一つひとつ、無数の谷の一筋、木々の一本一本、どれひとつとして同じものはないのに、一点の隙なくしっかりとまとまっている。そこに憩うサルの群れの存在がこの風景を完成させている。私は山や森は命の棲み家なのだとしみじみ思う。私の心に、もしかしたらサルの時代にまで遡ることのできる太古の記憶が甦る。稔り豊かな山に抱れた安心感、自然の恵みへの感謝の気持。

この情景を見ていると毎年何百頭ものサルが捕えられ命を奪われた時代があったことが嘘のようだ。昭和から平成にかけて人々は便利で手軽、見た目の良い物に惑わされ、少しでも余計にお金を得ようと遮二無二働いていた賢こと忙しが幅をきかせ、金さえあれば嘘も無恥もまかり通る世の中だった。村里も山里も日稼ぎ出稼ぎに追われ、田畑や山は機械まかせ農薬まかせ。その隙をついて野荒しに出るサルたち。過疎と高齢の村に彼らを追い払う余力はなかった。邪魔者は殺せ。

だがやがて人々は学んだ。江戸時代の食うや食わずの百姓たちがけっして無益な生殺を好まなかったことを。畑に害なすサルやイノシシであれ、同じ天のもとに生を受けたものどうし、苦しみや喜びを分かち合っていたのだ。昔よりゆとりあるはずの時代に生きる自分たちが、なぜサルの命を犠牲にしてきたのか、人々は反省し大いに恥じた。古き良き物を壊してにせ物をつくる「ふるさと創生」の嘘にも気づいた。昔から変わらぬものであってこそ古里なのだ。誇りたかき頑固者たちが村を守るようになった。山里にはつつましい夕餉の煙が立ち、村里には子供らの歌声が響く。奥山の深い森にけものらの密やかな生気がこもり、谷川は豊かに澄み岩魚や山女魚が踊る。それが帰るべき古里、人々の理想となった。

時を同じくして自然学が興り、人々は大地に学び生き物に共感した。たとえば野生の生き物のみの持つ、人に支配されない気高さ。あるいは彼らの磨ぎすまされた感覚、小気味よい身のこなしに。さらに彼らが、自然の恵みと怖れのもとで、時の試練を経た由諸正しい生き方をしていることへ。この共感は今の瞬間を生きる全ての生物は35億年の生命の歴史を共有するという自然学の第一原理に基づく。

この生命の歴史からみればサルと人は一、二代前に分家した親類のようなものだ。たとえばアフリカのチンパンジーの棲む森で過ごした時、当時7歳になる息子はいともたやすく彼らのなき声になじんでしまった。類人猿ともなれば親兄弟同然、彼らの間には相通ずる何か深いものがあったに違いない。これは、歴史的にも現在的にも人間（生物）はサル（類縁）を介して自然界の体系に内包されているという自然学の第二原理の例である。これら自然学の諸原理は自然界における人間の行為にも当てはめられるようになった。人々の理想は次第に現実に近づき古里には自然学の知恵に基づいて健康でゆとりある、地球を汚さぬ暮しが回復した。私の目の前に広がる調和のとれたこの風景もその成果のひとつなのだ。

さて、その知恵を生かす道を自然道という。今や美しい日本の自然にふさわしい生き物ニホンザルを鑑に、我国の風土にかなった自然道が拓けようとしている。彼らがこの島国に棲んでいてくれたおかげである。その自然道の導きのもと、見失われていた人間道も復興の兆しがある。まことに日出度くサルに感謝を表し奉る。

申年にあたり、私とサルとの馴れ初め縁、見果てぬ夢の自然道開拓の思いを披露させて頂いた次第である。

（龍谷大学非常勤講師・人類学）

## なきごえ1月号もくじ


動物と私 …… 2
トカラヤギのメスの赤ちゃん誕生 …… 3
'92年壬申（みずのえ・さる）の年に想う …… 4・5
サル山のサル …… 6・7
動物園グラフ・動物園日記 …… 8・9
動物なんでも相談室 …… 10
動物園ニュース …… 11


## 表紙の写真説明

**"ニホンザル"**

***(Macaca fuscata)***

個体名キュウリ・オス（河童に似ているので）

1980年に箕面で生まれました。もうりっぱな体ですが、子供ぽっさが残っています。

（撮影：大野尊信）

## "トカラヤギのメスの赤ちゃん誕生"

10月30日に生まれたトカラヤギの赤ちゃんが、こんなに大きくなりました。毎日、お母さんと楽しい日向ぼっこ。

（撮影：永田健一）

# 1992年壬申(みずのえ・さる)の年に想う —ニホンザルと民俗—



広瀬　鎮

○　干支（えと）のサル

1992年は、12年前の1980年(昭和55年)の庚申（かのえさる）についでやってきたサル年で、申年の人びとにとっては、ことさらに意義ふかい年となろう。新しい年は、十干十二支（えと）にちなんで次々と楽しいイベントが始まり、新春の到来を人びとはことほぐのである。そしてこの年は壬申（みずのえ・さる）と呼ばれる。申は御存知のように、十二支の第９位、時刻は15時から17時、方位は西南西、そして申とは「のぶ」、「重ねる」、「再びさせる」、「のばす」、「陰気がのびちぢみする」などいろいろに読まれ期待される。申はサルとして、長い間日本人の間では、深い興味を抱かれてきたし、その呼び名も、ましら、まし、よぶこどり、すずのみこ、えて、えんこ、えてこ、やえんぼう、などあげれば切りがない。40種をこえるサルの呼び名を考えてみても、日本にすみついて日本人と係わりをもちつづけたサルは、なかなかたいしたものだと思わざるをえないのである。そして、サル年がやってくるということは、それなりに、いろいろな思いをもたらせてくれるのであるが、長い歴史時代を通じて日本人は、あまりサルのことをよく思わなかったし、時と場合によっては、サルという動物は日本人にきらわれたり、さけられたりしてきたのである。今日でも、地方によっては、畠の作物をあらす害獣として嫌われている所もあるのだが、なぜか、そのくせ、サルのおかしさ、サルの可愛さなどは、人びとの心をなごませて、サルをおもしろがってきた。エトが申ということから、にぎやかな、新年がくりひろげられるにちがいない。

壬生狂言「蟹どん」サルカニ合戦を描写

○ニホンザルのすみかと日本人のサルとのつきあい

日本列島にニホンザルがすみついたのは、ざっと30万年ぐらい前の洪積世中期といわれている。哺乳動物をめぐる古生物学研究や、地質研究、考古学の研究からは、のこされた乏しい古骨などの分析をふまえて、ニホンザルたちは、まだ大陸と日本が地続きであった時代にやってきながらも、当時寒くて、食物となる植物のなかった北海道へは移動北上することがなく、やがて本州と北海道が、海でへだてられてしまってからは、多少あたたかく食物があったとしても、とうとうニホンザルたちは、北海道に渡らなかったと考えられてきた。したがってニホンザルは、四国、九州、本州を中心として、その後この列島にすみついた種なのである。だから、大へんな生きものだということになる。日本人の祖先たちは、ずっとあとから、この地へやってきて住みついたものと考えるのでニホンザルは、どうやら日本人よりも先住の動物ということになる。そのことも、その後の日本人のサルを思う気持、サル観に著しい特色をもたらすことになるのだが、サルたちの方がよっぽど長くこの国土（まだ国など成立していなかったのであるが）にすみ、自然環境にみごとに適応してきたのである。

大阪四天王寺庚申さんの三猿庵

したがって日本においては、あとからやってきた日本人の祖先たちにとっては、実に複雑な動物観をもたらすことになったのであり、狩猟にはじまる食用そして生命力にあふれたこの赤い顔の知能集団には、何かと畏敬、怖れを抱いたようである。残された残留物や伝承はそれ等のことを語りかけてくれるのであるが、このようなサルへの敬意は、薬用や呪術の世界をももたらして、ずいぶん長い間ニホンザルが、家畜としてのウマやウシの守護神として祀られてきたことが、今日しられていて、厩猿信仰は、まことに特異な信仰ともいえるのである。歴史時代の経過のなかでサルをめぐる人獣交渉の世界はどんどんひろがって行き、おそれられたり、祀られたりするなかでも、神や仏のお使い、使徒獣として日本人の信仰の普及に力を発揮するようになってくると、サルは、次第に、人びとの心の中では、征服されるもの、愛玩のもの、悔蔑のものという、人間の側からみると、サルはずっとずっとひくい立場にたたされてくる。日本人も、この土地にすみついたサルとは、なかなか平和的に共存し難くなっていたのである。

それは、狩猟から農耕へと森がきりひらかれたり、平野に農耕地がひろがって行くとサルたちと日本人の作る作物をめぐって、害獣としてのサルの認識が一段と高まって行くのである。そのなかにあっても、この動物に対しては、姿・形や行動のヒトへの類似からの関心も高く、一段とひくくみながらも、愛すべき生きものとして、サルのうちにこっけいさをみつけてきたのである。

こうしてみるとサルの民俗の根本にあるのは他でもない、サルのもつ両面性、人間にとっての善であり、悪でもある存在がこの生きものへの動物観念に特色をもたせたものと思われてならない。

今日では、サルは、多くの人びとに「おもしろい」動物として映っている。サルによる農作害に常々出合っている者にとっては決して好まれるものではないが、この嫌悪感も地域によっては、長くはつづかない。サルが50年もやってこないと、もうすっかりにくしみは忘れ去られている例によくぶつかるのである。

のど元すぎれば何とやらで、「サルたちは憎いが、可愛い」などという声がきかれてくるのである。日本人のサルという動物への思いこそは、アニマル・ロア（ヒトと動物の交流文化）としての興味をひきおこさせてくれるものといえよう。

○　人獣（ヒトとサル）交渉の文化

十二支動物のサル（申）に興味をもつ人びとはサルの名前から入ってサルのつく動物、植物、物の名称などと丹念にしらべれば、いかに日本においてこの動物が、にぎやかな話題につつまれてきたかを明らかにしてくれる。それは日本列島内のサルのつく地名においても言える。今となっては、追跡のしようもないことでもあるが、サルの生息地であったり、サルの姿や、行動に係わる地形であったりしてサルがもたらせた何かの事件と係わっているようである。サルの姿・形・色・声さまざまなサルからのメッセージが、物や事柄にとりいれられて話題はつきない。サルグツワや、サルマタ、など今はあまりつかわない言葉でもその語源がわからなくなってしまっているものも多いのであるが、サルという言葉をいみきらい、禁語とした時代があったところからみると、サルは、古い時代には、あまり日本人には好感がもたれなかったと思われるし、サルもひどい目にあったとみえて、その代表的な鳴き声が、キャッキャッと言われ続けて、このいじめられ、ひどい目にあったときの悲鳴の声を、サルの代表的鳴声とされてきているのである。

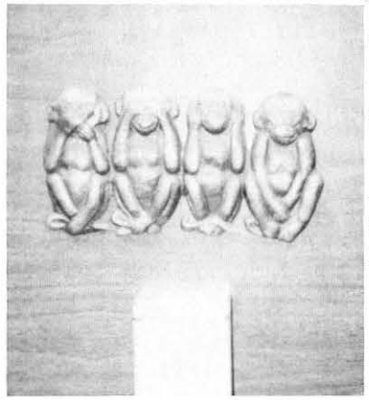
四天王寺庚申庵のお百度石

そんななかで、つい最近だが、日本の古代語について民族学研究の立場からサルについて富士短期大学の郭安三先生から、お手紙を頂いた。先生はマンチュリアの〈Sal(i)Sal が賢し、知識、怜巧〉からきているのではないかと指摘しておられ日本の言語としてサルのことをマシラと呼びならわしてきたことからこのサリ(怜巧)に接頭辞「真 Ma マ」を付してMa-Saliとなり、それが母音変換でMasilaになっているように思えるとして、ツングース系の弥生人が、満州一帯を離れて日本へやってきてサルに出合って命名したのだろうといっておられる。これは、まことにたのしい考えである。サルの行動や、形態のみに心をうばわれていた筆者にとっては郭先生のサルのもつ知能の高さからみとめて出来上った「Salu、サル」の呼び名に大へん興味をもった次第である。

○　サル学の発展と日本人

日本の霊長類学は、この30～40年の間に各分野にひろがってとくにニホンザルについては生態社会学、生理生態学、形態、心理、医学等の諸分野でも著しい成果があげられていることはよく知られている。そして日本人は、世界のどの民族よりも豊かなサルへの知識や、科学情報を手に入れたことにもなるのである。しかし、日本列島に30万年来すみついた日本人たちよりも先住動物であることもあってサルから教えられたことは多いといえよう。とくに歴史時代以降の日本人とニホンザルをめぐる人獣交渉の文化史は、時としてきびしい対立もあるが、日本人の関心をいつもよびつづけてきた。そこにニホンザルの民俗をめぐる実に豊かな文化事象が生じていたのである。それらのいくつかを「物」と「心」の世界に追ってみたいと思う。

幸い犬山にある財団法人日本モンキーセンターには、サルの人形コレクション猿二郎館があり大竹勝学芸員をはじめスタッフの方々が、ニホンザルの民芸人形を中心に調査研究がすすめられていることは喜こばしいことで明治29年の申歳生まれの岩崎昇氏（豊沢猿二郎氏）が、生涯かかって収集した「猿」が今日一般に公開されていて、地下の猿二郎さんもきっと心から喜こんでおられるに違いない。



「せざる」を入れて四ざるの出現

生前、多くのサルへ寄せた猿二郎さんのお話しを伺った。機会をえて、もっともっとお伝えしておかなくてはならないと思う昨今である。

それにしても十二支動物のコレクターや、十二支をめぐる民俗文化誌の出版物も多いがなかでもサルについては、数多く現われている。一体何が人々をしてサルにこんなに心をよせさせるのであろうか。人に似た叡知の生きもの、森の隣人であるサルとの長いつきあいの歴史の中で日本人は自からの動物観を豊かに形成してきたのであるが、やはり、サルは、“おもろいのや”と一言で言えそうである。

（名古屋学院大学教授）

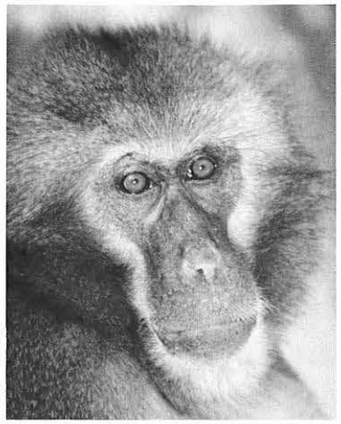
〈参考にした書籍〉


1．南　方　熊　楠　十二支考Ⅱ　南方熊楠選集２　平凡社　1984
2．村　崎　義　正　猿まわし千年の旅　築地書館　1991
3．森川洋二郎編著　猿曳き参上　平凡社　1991
4．佐藤佳子　孫悟空の誕生　玉川大学出版部　1980
5．飯　田　道　夫　猿よもやま話　評言社　1973
6．飯　田　道　夫　庚申信仰　人文書院　1989
7．広　瀬　　鎮　猿　法政大学出版部　1979
8．広　瀬　　鎮　アニマルロアの提唱　未来社　1984
9．広　瀬　　鎮　猿と日本人　第一書房　1989
10．広　瀬　　鎮　サルの学校　中央公論社　1981

# サル山のサル（ボスザルはいるか？）

私がサル山で、作業中あるいは観察中に入園者から受ける質問のほとんどは、
「ボスザルはいますか？」
「ボスザルはどれですか？」の二点に集約されます。1940年代の終り頃創生した日本のサル学は、同じ頃各地に開場された野猿公苑での研究成果を一般市民に広く伝えてくれました。その中で最も興味深く受けいれられたのは“ボスザル”の存在です。

群れの絶対的な支配者として、ボスザルがいる。この交代劇はしばしば、人間社会のそれとあいまって、政変とか、クーデターなどと、新聞の三面記事で紹介されることがあり、“ボスザル”というのは、国民的常識として今も市民権があたえられています。


アルファオス モミジ

そういうわけで、動物園や野猿公苑で、人々はそのことに強い興味をもつのです。

しかし、最近のサル学では“ボスザル”の存在が否定、疑問視され、呼び方も“いわゆるボスザル”とか、“第一位のサル”と表現されることが多くなってきました。

研究者間の論文では、αオス、αメイルと呼ばれています。

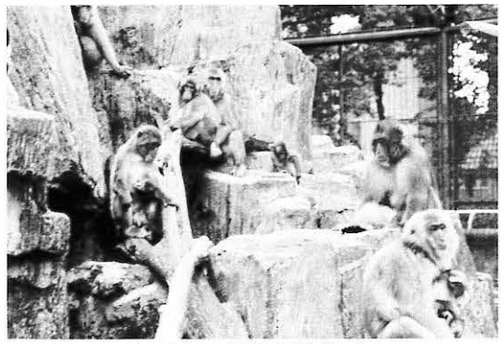
動物園のようなところで、市民に、“ボスザルはいません、αオスです。”といってはたして通用するでしょうか。私はこの問題を明確にする必要があると考え、当園のサル山での“ボスザル”について、観察を行い文献との比較も行いながら検討しました。

本題に入る前に、当園のサル山の歴史を少しふりかえってみましょう。

動物園をイメージする代表的な施設として位置づけられる一つにサル山があります。当園のサル山（古いパンフレットにはサルの丘として書かれています）昭和11年に建設ということですから、残り少なくなった戦前からの建物です。調べてみて面白いことに気がつきました。最初からニホンザルが飼育されていたのですが、頭数は少なく、一ケタどまりでした。現在は59頭ですから、サルを探すのにさぞかし苦労したのではと思います。その頃、数10頭のタイワンザル等が別の施設で飼育されていたにもかかわらず、あくまでいれかえることなくニホンザルだけでいったのは、誇れることだったと思います。戦争という時期はありましたが、サル山が群れ飼育という、サル山らしい姿になるのが昭和27年、天王寺公園と動物園を会場として開催された「婦人とこども大博覧会」で16頭が入園し、ようやく形が整ったことになります。この16頭のニホンザルは箕面の滝附近に出没していた群れでした。その頃はまだ野猿公苑は開場していませんから、5～6頭の姿がみられたにすぎなかったと聞いています。やがて、箕面のサルとその生息地が天然記念物にもなり元祖ともいえる大分県高崎山の野猿公苑らとともに、日本サル学の一翼をになっていくことになります。

その後、数回群れの入れかえを行っています。中でも、昭和43年に同じく入園した20頭の群れの数頭が、サル山から脱出する事件があり、現在のようにフェンスでおおわれた姿になったわけです。

現在飼育中のニホンザルも箕面のサルです。昭和57年9月に箕面D群から♂8頭♀17頭を受け継いだものです。現在は何頭か出園していますが、59頭飼育しています。内分けはオス30頭（成6頭）メス29頭（成21頭）です。その中で“いわゆるボス”はモミジという個体（1976年生）です。


モミジの近くには母親の子供がいます

では、このモミジの行動調査を通じ、“ボスザル”？はという問題を探ってみましょう。

まず、我々を含めた一般市民のもつ“ボスザル”は次のようなものだと思います。
1、力・けんかが強く、群れを統率している。
1、食物を独占することができる。
1、メスザルを独占することができる。
1、ボスの座は闘争により決着する。以上のようなことだと思います。そして、ボスザルを見つけるには、高い所にいる、いつも尾をあげている、最も大きなオスザルである、このようなことも一般的だと思います。入園者もこのようなサルをみつけては、勝手にこれがボスザルだと判断しているようです。たしかに、そのように見えるサルは見つかりますが入園者の声を聞いていますと、モミジをさしているとは限りません。

次にではどうしてボスザルが否定されるようになったのでしょうか。

白山の自然群を調査した伊沢紘生氏（現宮城教育大学教授）はその著書ニホンザルの生態の中で次のように書いています。

『群れの移動を常に誘導する特定のサル、すなわち「リーダー」が存在し、「リーダー」の「統率力」によって群れのまとまりが維持されている、というように話を飛躍させることは許されないだろう。真に「統率」と呼ぶに価する具体的な行動を、私はサルに見い出していないのだ。』

その他、野猿公苑からもリーダーということに疑問の声がでているようです。

“ボスザル”が統率者ではなく、単に強い個体であり、他の個体から一目おかれているにすぎないということでしょう。

当園の“いわゆるボスザル”モミジの場合はどうでしょうか。

昨年出産第1号(4/11)母オハギ、仔チョウシュウ

モミジは1976年生まれでオスザルの中では最年長です。体は最も大きいというわけではなく、むしろ1977年生まれのアカマツの方が毛が長いためか大きくみえます。

先程のボスザルのイメージと照合してみましょう。動物園のサル山は封鎖的で過密な社会です。群れが移動するとか、外敵の侵入はありません。ですからリーダーという呼び方は適切ではありません。

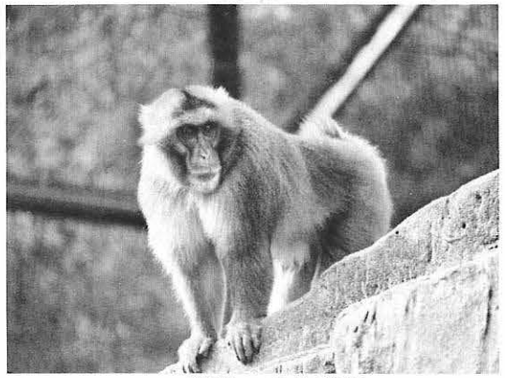
**§食物を独占するか**

給餌時のモミジの行動は、他の個体のようにがさつではなく、少し間を置いて採食におりてきます。モミジが食べだすと、他の個体は少しゆずり、モミジがその場を離れるまでまっています。時々近かずきすぎた個体が攻撃されることがあります。でも食物を特別独占している印象はうけません。少し食べると、すぐに少し高い所に移りますのでむしろ、少食ではないかと思われます。入園者からの投餌を積極的に取ることもなく孤高な感じを与えます、普段は他の個体からグルーミングされたり、することはほとんどありません。私がモミジがグルーミングしているのを初めてみたのは3月28日です。

今年の出産第1号のオハギがモミジにグルーミングされていたのです。その後、4月11日にオハギはオスの仔を出産しました。出産前後、メスザルがモミジを頼っているらしく、同様なのをもう一頭確認しています。又、グルーミングされなかった個体も出産後、モミジのそばに数日間いることを観察しています。モミジがメスザル達に非常に頼られていることは間違いありません。

**§メスザルを独占するか**

メスザルを独占するということは、最も“ボスザル”らしさをあらわしているかも知れません。しかし、最近の研究成果では、むしろ“ボスザル”はもてないといわれています。多くのメスザル達に頼られていることは間違いないのですが、そのことが、必ずしも多くと交尾しているわけではないといわれています。このことは遺伝子レベルでも明らかになってます。当園のモミジはどうでしょうか。一昨年11月初旬から昨年の2月上旬までに、私が確認したモミジの交尾回数は9回です。その他のオスの中で完全に交尾したと思われるのは一頭だけです。何頭かはメスに対しマウントを行ってますが、交尾にまでいたったかは確認していません。飼育環境下という特殊な条件なのかもしれませんが、見た目には、メスザルを独占しているようです。（今のところは一昨年とは少し違った群れの行動がみられますが）


発情期のモミジの表情

**§闘争はあるか**

将来、どのような動きがあるかはわかりませんがオスザル間のはげしい闘争はみられません。他の個体はモミジを一目置いています。それとメスザルはモミジを頼りにしていることは明らかです。しかし、そのことが、統率力があるとか、リーダーシップがあるとか、権力的であるとは思えません。

ボスザルという呼び方が、古い概念でいうところの権力的な意味をもつボスザルでは否定されますが、最近、上司として使われるボスという呼び方がふさわしいのではと思いますが、動物園のようなところで、入園者に情報を伝える時、非常に説明にむずかしい項目であります。

“ボスザル”はいませんとは言えませんし、
“ボスザル”ではありません“アルファメイル”ですなどというのも、不親切だと思います。

まだ一年半程の観察であり、他園との比較、野猿公苑での情報も多くは持っていませんが、第1位のサルと表現されるようになってきているようです。

現在サル山の前にモミジの写真を展示して、最優位のサルですと表示しています。興味をもってモミジを探す人は少なくありませんが、やはり、ボスザルだと認識しているように思われます。

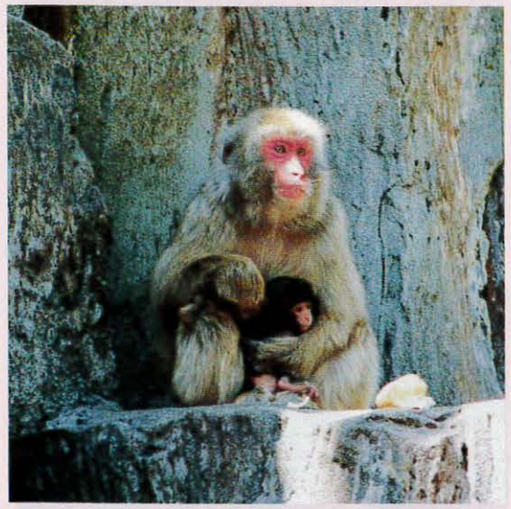
入園者からの質問にはわかりやすく説明していますが、国民的常識をくつがえすには、むずかしいことです。

（飼育課：大野 尊信）

# 動物園グラフ

## “ニホンザル”
## ガンバレ！チョウシュウ

（撮影：大 野 尊 信）



チョウシュウ（♂）母親オハギ1991年４月11日生。この年一番最初の赤ちゃんです。２日後の写真です。

10日目位になると、少しずつ親からもはなれて歩きだします。

兄さん姉さん達に守られて、育っています。

まだ足もとは、しっかりしていませんが。

## 11月の動物園日記

11/ 1　オオミズナギドリが１羽保護されました。

11/ 2　昨日保護したオオミズナギドリを南港で自然復帰させました。

11/ 3　染色体検査によるタンチョウの性別鑑定の結果今年生まれた雛は雄３羽、雌１羽であることが判明しました。

11/ 4　オオコノハズクが１羽保護されました。
今年生まれたワライカワセミの性別鑑定を内視鏡で行い、雌と判明しました。
秋の動物と花のフェスティバルが終了しました。

11/ 5　オシドリ10羽を東京都井の頭自然文化園に寄贈しました。
シンガポール動物園に贈るバーバリシープ６頭の検疫を開始しました。

11/ 7　衰弱したオナガを園内で保護しました。
キーウィの雄「キオト」と雌「プクヌイ」を同居させ徹夜で観察しました。（２日間）

11/ 11　オシドリ２羽を上野動物園に寄贈しました。
カワウ６羽が井の頭自然文化園から来園しました。
動物園事務所が天王寺公園の事務所と統合され、新事務所に引越しました。

11/ 12　オオミズナギドリが１羽保護されました。
上野動物園で開催された「ゾウ飼育者会議」に当園から中川飼育課長代理と柴田係員が出席しました。

僕は男の子だい！自分で歩くんだ。

と、いってはみたものの。

７月下旬。たくましくなったでしょ。

昨年は12頭生まれました。群れの中で元気に育っていくのです。

11/ 13・オオミズナギドリが１羽保護されました。

11/ 14・タンチョウの雄１羽とベニジュケイの雌２羽をシンガポールのジュロンバードパークに贈りました。

11/ 15・キンクロハジロの雌が保護されました。

11/ 17・第79回「動物のお話とスライドの会」でトラ・ウォッチングを行いました。
ボランティアの夜の動物園見学会を行いました。

11/ 19・写真コンクールの審査会を行いました。

11/ 21・秋田市の大森山動物園からフタコブラクダの雌が来園しました。

11/ 22・染色体による性別判定のためクロヅル２羽の採血と皮膚の採取を行いました。

11/ 24・静岡市日本平動物園の三宅飼育課長が来園されました。

11/ 26・キーウィの体重測定を行いました。

11/ 29・近畿地区動物園獣医師勉強会を当園で開催しました。

11/ 30・クロヅルの染色体検査による性別鑑定の結果、雌雄であることが判明しました。

# 動物なんでも相談室

## 1．ムササビは哺乳類であるのになぜ鳥のように飛ぶことが出来るのでしょうか。

たしかにムササビは木から木へ空中を飛びますが正確には鳥のように羽ばたいて飛ぶのではなく、高いところから低いところへ滑空して飛び移るだけです。従って飛行は１回限りで、もう一度飛ぼうとするときは、木の高いところへ登り直さなければならないわけです。

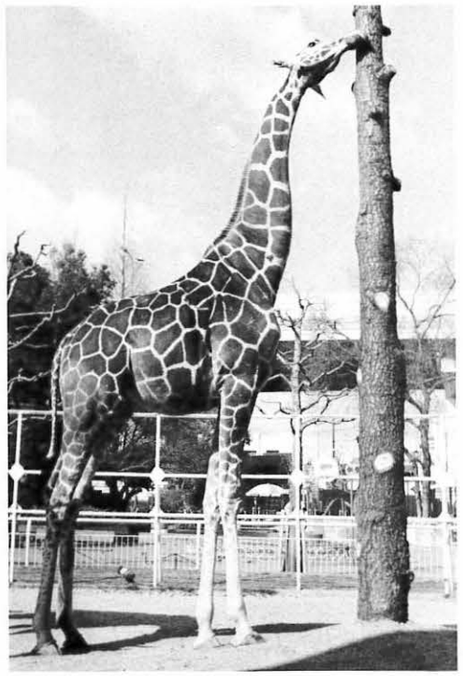
このようなことが出来るのは、首すじから前足くび、前足くびから後足くび、そして後足くびから尾にかけて皮ふがのびた飛膜を持っているからです。飛び移るときは両前足、後足をいっぱいに伸ばして飛膜を張り、尾でバランスをとります。このように木から木へ移動が出来ますから、天敵の多い地上におりなくてもよく、また、樹上で天敵におそわれてもサッと隣の木へ逃げることが出来ますね。

参考までに、鳥のように羽ばたいて空を飛ぶことができる哺乳類はコウモリぐらいでしょうか。

（飼育課・吉本　昌俊）

## 2.どうしてキリンの首は長いのですか？

キリンは動物園で人気者のベストテンに必ずはいる動物です。このように非常に人気が高いのは、やはりあの長い首とゆったり走くあの長い足が子供達の興味を引くからだと思います。あのキリンの長い首も、また他の哺乳類の首の骨の数も基本的には７つです。当園でもっとも小さな哺乳類のアカネズミの首の骨ももちろん７つですが、体長に較べて首の長さを考えた場合、やはりずば抜けてキリンの首の長さに勝るものはいません。これは単に首の骨の１節１節が長いということになります。この首が長いということは先祖のキリンの中でより首の長いものが勝ちのこり、また草食動物の中の食い分けでより高い木の枝、葉が食べられるように進化していったものと思われます。　（飼育課・吉本　昌俊）







# 動物園ニュース

### §事務所移転

天王寺動物園は一昨年２月24日に組織上、天王寺公園と一体化して天王寺動植物公園事務所と名称が改められていましたが、実質上事務所自体は２ヶ所に分散した状態が続いていました。昨年１月から本格的に新事務所の建設が始まり、ようやく10月中旬新事務所の建物が完成しました。引越しは11月10、11日に行われ名実共に天王寺動植物公園事務所となりました。なお、これに伴ない所在地の地番が次のとおり変更しましたのでお知らせします。

新事務所（東側から望む）

〒543　大阪市天王寺区茶臼山町１―108

### §ジュロンバードパークへ、タンチョウとベニジュケイをプレゼント

当園では３年９月、シンガポールのジュロンバードパークから親善動物交換により、ヒクイドリ１ペアとサイチョウ（メス）１羽をいただきましたが、今回は当園側が、ジュロンバードパークへタンチョウのオス１羽とベニジュケイのメス２羽を11月14日に贈りました。

贈られたタンチョウ（上）とベニジュケイ（下）

### §トラのウオッチング開催

11月17日（日）の午後、一般入園者300 名を対象に15回に分けて、トラ舎の裏側、つまりトラの寝室やキーパー通路から運動場を見学していただきました。下は幼児から上はおじいさん、おばあさんまでが期待と恐怖感を抱きながらはじめて見るトラ舎の中を興味深く見学していただきました。トラを間近に見ていただけるようにと寝室にはアムールトラのオス１頭を収容し、エサも少し与えて食べるところを見ていただきましたが時折のトラの吠える声に、見学者の多くから恐怖の入りまじった喚声が聞かれました。それでも、飼育担当者の説明ははじめての経験でもあり熱心に聞き入っていました。

寝室内のトラに見入る入園者

### §ボランティアの夜の動物園観察会

毎年恒例になっている当園の大阪動物園ボランティアのための夜の動物園観察会を11月17日（日）に開催しました。これは、夜間、園内の動物たちが、どのように過ごしているのかを、ボランティアの会員に見てもらうという主旨で毎年行われているもので、今年は23名の参加がありました。内容は出発前に夜に活動する動物の特徴や観察のポイント等の講義が１時間程当園獣医師からあり、その後、５時から静まりかえった園内を観察しました。きっと様々な発見があったものと思われます。

夜の爬虫類舎見学中のボランティア

### ⊙お知らせ

動物のお話とスライドの会
　１月20日（日）サルのお話
　時間：午後１時～２時
　場所：レクチャールーム。

### ⊙テレフォンサービス実施中

催し物、トピックスなど魅力たっぷりの動物園の案内を、24時間テレフォンサービスで行っていますので、ぜひご利用ください。

電話番号　７７１―９９９９

### 現在の飼育動物数

（平成３年11月30日現在）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 哺乳類 | 12目 | 93種 | 447点 |
| 鳥類 | 20目 | 169種 | 822点 |
| 爬虫類 | 3目 | 30種 | 93点 |
| 計 | 35目 | 292種 | 1362点 |

### ＊ 休園日のお知らせ ＊

動物園の休園日は毎週月曜日（休日の場合は翌日）です。

開園時間は午前９時30分から午後５時までで、午後４時まで入園できます。

愛ある暮し、応援します。

# Kintetsu

近鉄百貨店



DEAR LIFE BOOKS

## 生態・飼育・図鑑が一つの本の中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光／監修
B５変型判・オールカラー
定価580円

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？　動物園での世話の仕方は？　仲間は？　など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしとかいかたシリーズ＜既刊本＞
B5変型判・オールカラー・各定価580円

**むし** くらしとかいかた
野山でみかける身近な昆虫たち250種を紹介。

**ちいさないきもの** くらしとかいかた
昆虫以外の小さな生き物を320種紹介。

お求めは、お近くの書店で。　ひかりのくに株式会社　本社／〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表



室内装飾設計施工・バラエティ雑貨卸

**1st ファースト商会**

〒559 大阪市住之江区平林南１丁目２番５７号
ヘッドビル２０２号
ＴＥＬ 06-686-4033　ＦＡＸ 06-686-4032



オートフォーカスカメラに

**フジカラー SUPER HG 400**

ピントが合いやすいフイルムです

カメラの大林
桜橋本店　☎341—8091
阪急三番街店　☎372—5031
OHVAC店（ギャレ大阪）　☎346—7606



全国の愛犬家の共感を呼ぶ無比の愛犬歌集　絶賛四版

## 歌集犬の歌

平岩米吉著

著者が、約四十年の間に、共に暮らした七十余頭の犬の生と死を歌った四百十九首を収録。同時に、その誕生より老齢に至る写真四十七図を収めた、犬の一生の生態写真集でもある。

天金・美装箱入
Ｂ６判・270頁
3000円・〒不要

《感動の言葉》
☆ この歌は愛犬と異体同心の境地である。（英文学者）
☆ 人として注ぎ得る愛情の極致を示している。（動物研究家）
☆ 一首ごとに、ことごとく魂にひびく歌です。（動物愛護家）

●本書は、書店ではお買い求めになれません。直接当会へお申し込みください。

〒152／東京都目黒区自由が丘3-12-2　動物文学会　電話(03)717-1659／振替・東京5-9800



新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分（10本常備）

●対　　象／保育園・幼稚園・小学校の先生
●貸出期間／10日間
●貸 出 料／無料（但し郵送料480円は必要）
●申 込 先／当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

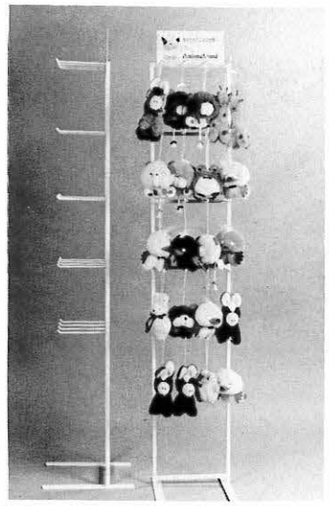
**コアラテレホンカード（限定販売）**
**好評発売中 ¥800（50度用）**

## 天王寺動物園の本

入園の記念・手引に……

オールカラー
**500円**
園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201



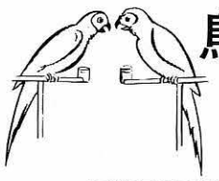
## 動物ぬいぐるみは
## 子供のゆかいなお友達

各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

有限会社 **アニメランド**

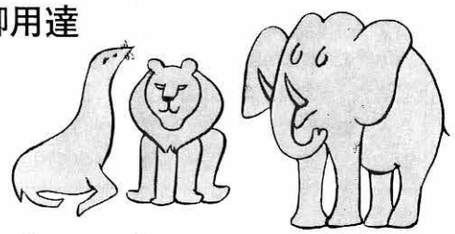
〒547 大阪市平野区西脇４丁目５番22号
TEL：(06)704－８５８０
FAX：(06)704－８５６５

---



## 鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



- 医学実験用動物
- 宣伝用、テレビ用、貸動物
- 原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券250円

有限会社 **吉　川　商　会**

本　社　神戸市中央区中山手通３丁目11番４号　電話(078)221-8195㈹
飼育場　兵庫県小野市来住町１５１３番地

---

## たのしい〝動物のお話〟は、
## ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!

園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回　20円

---

## 動物園内での
## お食事、ご休憩は

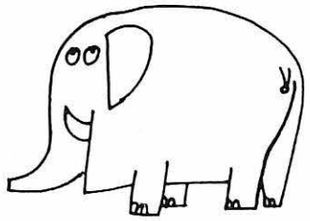
大阪市天王寺動物園内

**中　央　売　店**

☎ (06) ７７１－０９７３

---

## 天王寺動物園内

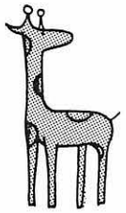


**南園売店**

大阪市天王寺区茶臼山町６－74
電話 (06) ７７１－７１１０番

---

## 園内でのお写真は…
## 動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機しておりますのでご説明に伺いました際は、よろしくお願い致します。

**カラー写真** キャビネ1枚 **500円**

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社
ＴＥＬ 06－856－7444

なきごえ　1992年1月10日発行（毎月10日発行）第28巻　第1号　（通巻317号）

編　集／大阪市天王寺動植物公園事務所　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6—74
発行人／大阪市天王寺動物園協会 土井良彦　電話 大阪 (06) 771—0201
印刷所／株式会社 松村善進堂　定価150円(送料共) 1年継続(12部) 1,650円(送料共)　振替口座 大阪3—3783 23



編集委員（中山良三郎／村上 昭／中尾啓一／樽本 勲／中川哲男／吉本昌俊／山根和弘／大谷直樹／宮下 実／長瀬健二郎／榊原安昭／森本委利／竹田正人／永田健一／前田 茂／大野尊信／野口秀高／早川 篤／赤松 健／大川光雄／土谷正道／山本貞幸）